

三字句・四字句への返り点

— 〈附説〉『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について

古田島洋介*

現行の返り点法は、レ点の用法を厳格に規定しておきさえすれば、訓読者によるばらつきをほとんど防ぐことができる。その厳格な規定とは、次のような内容だ。

レ点 連続した二字の上下を転倒させる。

〔付帯事項〕

i 連続した二字の上下を転倒させる場合は、必ずレ点を用い、他の返り点を用いてはならない。

ii 連続した二字の上下を転倒させる以外の場合に、レ点を用いてはならない。

一二点その他の用法がぶれる可能性は皆無と言ってよい。返り点に差異が生じる場面は、大半がレ点がらみのため、右の規定を遵守している

かぎり、だれが付けても同じ返り点になるはずだ。現行の返り点法は、ほぼ機械的な処理が可能なのである。

ただし、例の連続符号が現れると、返り点がふらつくおそれ無しとしない。連続符号は返り点の補助符号とはいえず、下から上に返る機能を持つ返り点に、上から下へとつなげる機能を持つ連続符号がからむと、ついで返り点を付ける手もとが狂いやすいからだ。右に「ほぼ機械的な」と及び腰に記したのは、そのためである。

連続符号がらみとなれば、二字句への返り点でも面倒が起こりうる。

・ 軽「蔑臣下」（臣下を軽蔑す）

「下」から「軽」に返るのだから、一二点の位置は動かない。もっとも、一二点を打ただけでは、「軽」と「蔑」が分断されてしまうので、「軽蔑」を熟語として読むとなると、右のように連続符号を付けるしかないわけだ。単に二字句に返すだけであれば、原則そのまま解決が利く。

問題が起こるのは、連続符号を付けた二字句から、さらに上に返る場合である。

・ 患「三所」以立（立つ所以を患ふ）

一点「立」から二点「所」に返り、連続符号で「以」に下りて「所以」と読む。そして、さらに「以」から上方の「患」に返るのであるから、「患」と「以」が連続した二字でない以上、「患」には三点で進むことになる。原則どおりに事を運べば、右のような返り点になるはず

だ。

ところが、殊に歴史学・古文書学の方面では、現に左のような返り点も行われている。

・患^ッ所^ッ以^ッ立^ッ（同右）

連読符号で結んだ「所以」を一字のごとく見なし、レ点で「患」に返っている。こうした返り点は、レ点の用法に例外を生じることになるため、甚だ好ましくならぬ印象だ。レ点の用法を「連続した二字の上下を転倒させる」と規定するかぎり、右のレ点では「所」から「患」に返すことになり、「所以」の「以」から「患」には返れないはずだからである。なぜレ点の用法くらい統一できないのか。遺憾としか言いようがないが、訓点中の訓点たる返り点の不統一すら問題視されぬほど漢文教育が衰退しているのが実情なのだろう。

もっとも、この種の問題として、元はと言えば、返り点に連読符号がからまることから生じる現象にほかならない。そこで、本稿では、さらに字数が増えた場合、すなわち三字句・四字句に返して連読符号を付ける場面について考察を試みることにする。もし三字句・四字句に返り、さらに上に返すさいの合理的な措置が確定できれば、右のような二字句から上に返る場合についても、改めて何らかの統一方針が見出だせるだろうとの算段だ。理屈のうえでは五字句・六字句……もあり得るはずだが、未だ実例を目にしていない。

一 三字句への返り読み

手始めとして、単に三字句に返すだけの場合について返り点を確認しておこう。

・今^ニ臣^ニ生^ニ十^ニ二^ニ歳^ニ於^ニ茲^ニ一^ニ矣^ニ（今^ニ臣^ニ生^ニま^レれ^テ茲^ニに^ニ十^ニ二^ニ歳^ニな^リ）

*『戦国策』秦五

・蓋^三三^三百^三一^三年^三于^三此^三一^三矣^三（蓋^シ此^ニに^ニ三^三百^三年^三な^リ）

*〔宋〕蘇軾「潮州韓文公廟碑」

いずれも数詞の三字句に返る例である。「茲」から「十」へ、また「此」から「三」へ返る以上、それぞれ一二点の位置は不動だ。連読符号を二つ連用するのも、三字から成る数詞を読むには最も穏当な措置だろう。厳密には二つの数詞とも「十二+歳」「三百+年」すなわち「〇〇+〇」の語構成であるから、その切れめを重んじれば、次のような返り点も打てなくはないが。

・今^ニ臣^ニ生^ニ十^ニ二^ニ歳^ニ於^ニ茲^ニ一^ニ矣^ニ

・蓋^三三^三百^三一^三年^三于^三此^三一^三矣^三

どちらの三点とも、間が抜けたような空振りの印象を否めまい。好んで付ける類の返り点でないことはたしかである。さらに例を挙げれば

・奴^三虜^三使^三之^三（之^ニを^ニ奴^ニ虜^ニ使^ス） *『史記』項羽本紀

やはり一二点の位置は変えようがない。ただし、これは、名詞「奴

「虜」が副詞に転用されて動詞「使」に載り、全体として動詞になった三字句であるため、「奴虜」に送り仮名「トシテ」または「ノゴトク」を付け、左のように訓読することも可能である。

・奴虜使^レ之^一(奴虜として之を使ふ／奴虜のごとく之を使ふ)

こうした訓読が許される以上、「奴虜使」が「奴虜+使」の構成であることは明白であるから、そのまま切らずに三字句として扱うさい、次のような返り点を打つ可能性もあり得るだろう。前掲二例と同じく、三点が何やら間の抜けた印象を与えることに変わりはないけれども。

・奴^三虜使^三之^一(之を奴虜使す)

まったく同じ事情が「奴僕視之」や「児童視之」にも当てはまる。いづれも副詞に転用された名詞「奴僕」「児童」が、動詞「視」に冠せられているからだ。単なる確認にすぎないが、右と同一の操作を加えてみれば――

・奴^三僕視^三之^一(之を奴僕視す)

* (江戸) 頼山陽『日本外史』卷二「源氏前記」平氏

↓奴僕視^レ之^一(奴僕として之を視る／奴僕のごとく之を視る)

↓奴^三僕視^三之^一(之を奴僕視す)

・児^三童視^三之^一(之を児童視す)

* (江戸) 頼山陽『日本外史』卷二十二「徳川氏正記」徳川氏五

↓児童視^レ之^一(児童として之を視る／児童のごとく之を視る)

↓児^三童視^三之^一(之を児童視す)

同様に、「白眼視人」(人を白眼視す)についても、「白眼視人」(白眼にして人を視る／白眼もて人を視る)あるいは「白眼視三人」(人を白眼視す)と変奏が利きそうだが、未だ漢籍中に「白眼視」の用例を見ない。現代中国語ならば「白眼看人」と言うところだが、さすがに「白眼看」を音読みして「人を白眼看す」とサ変動詞扱いする気にはなれないだろう。日本語として、いかにも不自然な響きだからである。右によって確認できるように、単に三字句に返るだけであれば、連続符号を連用して当該三字を音読みしておくのが最も自然である。語構成を重んじて三点まで用いる方法を支持する向きは皆無であろう。では、三字句に返った後、さらに上に返る場合はどうか。

・越雖^三蛮夷、其先豈嘗有^三大功^三徳於民^三哉、何其久也。

* 『史記』東夷列伝

(越は蛮夷と雖も、其の先豈に嘗て民に大功徳有りしか、何ぞ其れ久しきや)

「豈」が感嘆を表す一文である。「民」から「大」への一二点は動かかない。そして、単に三字句へ返った場合と同じく、連続符号を連用して「大功徳」三字をつなぎ、そこから三点で「有」に返している。これはこれで穏当な返り点だろう。

もっとも、「大功徳」は、だれが見ても「大+功徳」(大いなる功徳)すなわち「〇+〇〇」という語構成だ。それは、類似した表現を持つ「有^三功^三徳於民^三者、加^レ地進^レ律」(民に功徳有る者は、地を加へ律を進

む／『礼記』王制)を一瞥しても明らかだろう。となれば、次のような
 返り点も打てるはずである。

・其先豈嘗有^四大^三功^三徳於民^一哉、何其久也。

単に三字句に返す場合は、三点がいかにも虚しく映ったが、ここで
 三点は、返しどころの四点が上方にあるだけ虚しさが減じるだろう。似
 た事情が次の例にも当てはまる。

・有^三楚^二大夫於此^一(此に楚の大夫有り) *『孟子』滕文公下
 ・有^四楚^二大夫於此^一(同右)

だれの目にも、連読符号を連用した前者のほうが読みやすいだろう。

けれども、「楚+大夫」(楚の大夫)すなわち「○+○○」という語構成
 を素直に反映させたと考えれば、後者の返り点にもそれなりの合理性が
 あるわけだ。後者の三点も、落ち着き先の四点があるだけに、空振りの
 印象は与えないはずだ。

何やら屁理屈をこねているように見えるかもしれないが、決して徒ら
 に事を複雑にしているわけではない。現に、次のような例になると、四
 点まで用いる方式もなかなか侮りがたいからである。

・夫庸知^四其年之先^三後^二生於吾^一乎 *『唐』韓愈「師説」
 (夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや)

たしかに、取り敢えずは、こうした連読符号の連用方式こそが穏当だ

ろう。けれども、この訓読が意味の表出において優れているかとなると、
 甚だ眉唾物ではなからうか。なぜなら、だれが読んでも「其の年の吾よ
 り先後生なる」が日本語として意味不明だからである。そもそも「先後
 生」などという三字熟語は存在しない。もし一見して理解できたとすれ
 ば、それは、まさにこの有名な例文によって、どこぞで解釈を学んだこ
 とがあるからだろう。「先後生」とは、「先生」と「後生」を合成かつ縮
 約した表現で、「或先生或後生」(或いは先に生まれ或いは後に生まるる
 を)と言うに等しい。要するに「(自分よりも)年上なのか年下なのか」
 との意味である。これを枉がりなりにも反映させれば、実際、次のよう
 に訓読することも可能だろう。

・夫庸知^四其年之先^三後生^二於吾^一乎
 (夫れ庸ぞ其の年の吾に先後して生まるることを知らんや)

これは往時の訓読で、返り点も右のようになっていて、「先後生」を
 「先後して生まる」すなわち「先後+生」と切り、「先後」を音読み、
 「生」を訓読みした以上、「先^三後^二生^一」とつなげて読む気になれなかつた
 のだろう。これはこれで一つの訓読である。そして、こうした訓読をも
 許容するためには、三字句を切って三四点を用いる方式をも認めるしか
 あるまい。「とにかく三字句は連読符号を連用して機械的につないでし
 まえばよい」では事がすまないわけだ。

以上、三字句に返るさいの方針は、暫く左のごとくまとめられるだろ
 う。

①三字句に返るだけの場合は、単に連読符号を連用して三字をつな

げればよい。

②三字句に返り、さらに上へと返す場合は、連読符号を連用して三字をつなげてよく、「○○+○」または「○+○○」の語構成に従って切り、「○○○」および「○」それぞれに返り点を付けてもよい。

二 四字句への返り読み

四字句に返すのは、かえて三字句よりも例が多いかと思える。まずは語構成を重んじた方式の返り点を以て用例を挙げてみよう。三字句とは異なり、四字句の場合は、四字を語構成に従って二字ずつに切り、それぞれに返り点を打つのが一般的かと思われる。五つだけ例を挙げておく。

- ・三令五申之（これに三令五申す） * 『史記』孫子呉起列伝（4）
- ・其畏（そ）惡（を）敵（を）尊（を）秦（を）一也明矣 * 『戦国策』魏二（其の秦を畏惡敵尊するや明らかなり）
- ・重（これ）賞（を）尊（を）爵（を）之（を） * 『六韜』文韜「上賢」（之を重賞尊爵す）
- ・或掣（ある）掣（ある）洩（ある）洩（ある）於（に）裸人之国、或汎（ある）汎（ある）愁（ある）愁（ある）於（に）黒齒之邦（ある）
- * 『晋』木華「海賦」
（或いは裸人の国に掣掣洩洩し、或いは黒齒の邦に汎汎愁愁す）
- ・鱷魚之涵（ある）洩（ある）卵（ある）育（ある）於（に）此、亦固其所 * 『唐』韓愈「鰐魚文」
（鱷魚の此に涵洩卵育するも、亦た固より其の所なり）

もっとも、前述のごとく、時として異なった返り点法を用いる歴史学・古文書学の方面では、やはり異なる方式が一般のようだ。左のごとき返り点のほうが目につくのである。

- ・收（これ）藏（を）愛（を）惜（を）之（を） （之を收藏愛惜す）
- ・区（これ）处（を）分（を）置（を）倭人 （倭人を区処分置す）

この方式に則れば、右掲の五例も次のように返り点を打つことになる。いずれも訓読に変更は生じず、書き下し文も完全に一致するが。

- ・三令五申之
- ・其畏惡敵尊秦一也明矣
- ・重賞尊爵之
- ・或掣掣洩洩於裸人之国、或汎汎愁愁於黒齒之邦
- ・鱷魚之涵洩卵育於此、亦固其所

四字句の返り点は、たとえ二字ずつに切っても、二字ゆえに音読みしてしまうのが通例であり、訓読みを交えることはない。したがって、語構成を重んじて二字ずつに切り、それぞれに返り点を付けるか、または連読符号を三つ連用して四字すべてをつなげてしまふかのいずれかである。二種の方式があることだけを確認しておけば十分だろう。

とはいえ、こうした了解がぐらつき、現に珍妙な返り点が飛び出す場面もあるので、ここで指摘しておこう。決して珍本と称すべき書籍に見られる現象ではない。何と『論語』の一節において、まったく常識を踏

みにじるような返り点が出回っているのだ。それは左の一文である。

・有三年之愛於其父母乎 *『論語』陽貨

(其の父母に三年の愛有るか)

これも四字句に返る例の一たるを失わない。「其父母」から四字句「三年之愛」に返り、さらに上の「有」へと返す例である。字を逐えば、「母」に一点、「三」に二点を打ち、三つの連続符号で「三年之愛」四字を連結、最後に三点で「有」に返すことに疑問の余地はないはずだ。

・有三年之愛於其父母乎

もしぶれが生じるとすれば、「三年之愛」に連続符号を付ける場面だけに違いない。四字ゆえ二字ずつに切りたいところだが、下二字「之愛」が熟語とほ言いたいので、「三年之愛」と返り点を付けてみると、さすがに不自然な印象である。けれども、「三年+之+愛」と切ると、語構成にこそ忠実なもの、ますます返り点が複雑化して「三年之愛」となってしまい、これまた甚だしい違和感を拭えない。そこで、やはり連続符号を連用し、結局「三年之愛」で妥協しておくのが穏当な態度だろう。

ところが、である。巷間の『論語』をのぞいてみると、まったく基本をわきまえない返り点が行っているのだ。たとえば、次のような返り点である(例文の右肩に付けた*は、現行の返り点法に鑑みて、誤った返り点を意味する)。

・有三年之愛於其父母乎⁽⁶⁾

(其の父母に三年の愛有るか)

「母」に一点を付けておきながら、次に読んでいる「三」に二点を打たず、なんと連続符号で連結した「三年之愛」の「愛」に二点を添えている。この伝でゆけば、例の「吾日に吾が身を三省す」(『論語』学而)の返り点も「吾日三省吾身」となりそうだが、これについては正しく「吾日三省吾身」と付けているのだから、腑に落ちぬ話だ。注解者が自身で連続符号を連用した四字句「三年之愛」に自ら驚き、混乱を来した結果、つい二点を打つときに手もとが狂ったとしか思えない。

また、他の一書も「その父母に三年の愛有るか?」と書き下しながら、なぜか左のように返り点を打っている。

・有三年之愛於其父母乎⁽⁷⁾

この返り点に従って「その父母に三年の愛有るか?」と訓読できるとすれば、神業ならぬ離れ業であろう。憶測するに、当初は「三年の愛をその父母に有するか?」とでも書き下し、それに符合する返り点を付けておきながら、後日、書き下し文を「その父母に三年の愛有るか?」に変更、ただし返り点は改めるのを失念した、という仕儀なのであろう。

もっとも、右の二書は、誤りがわかりやすいという点で、まだしもである。なにしろ、少し時をさかのぼると、書き下し文も通釈もないまま、単に次のような返り点を示しただけの書物さえあるのだから。

・有_四三_三年之愛_三於其父母_一乎⁽⁸⁾

正直なところ、どのように訓読しているのか、私には理解できない。律儀に返り点を逐えば、「之_{これ}其の父母を愛すること三年有りや」とでも読むしかないだろう。一瞬もっともらしく響くかもしれないが、文法上は無理としか言いようのない読み方だ。たぶん、二点と三点が誤植ゆえに入れ替わっており、本来は「有_四三_三年之_一愛_三於其父母_一乎」すなわち「其_その父母_{ふぼ}に三年_{さんねん}の愛_{あい}有_あるか」と訓読しているのではないかと想像するが、この想像が正鵠を射ているとすれば、吟味すべきは「愛」に三点を付ける必要があるのかという問題だけとなる。もちろん、現行の返り点法によれば、「愛」の三点は不要との結論に達するのであるが。

いづれにせよ、こうした返り点の誤謬が漢籍の代表中の代表とも称すべき『論語』に見られるのだから、まことに暗澹たる心持ちである。せめて各種の文庫版『論語』が正しい返り点を提供していただければと思うのだが、文庫版は文庫ゆえの紙面の制約があるためか、訓点すなわち返り点や送り仮名を省略しているのが常態だ。もし当該の一文について返り点に関する疑問が生じたとしても、ただちに何らかの書物で解決できるかどうか。まさに現今の漢文学習の衰弱を象徴するようなお寒い話である。

三 まとめ

現行の返り点法は、おそらく漢文の教員でさえ大半が目にしたことのない明治四十五年（一九一二年）三月二十九日付『官報』第八六三〇号所載の文部省「漢文教教授ニ関スル調査報告⁽⁹⁾」に基づき、あとは適宜に訓読

者が工夫することになっていく。今を去ること一百年となれば、連読符号^{ハイフン}など初心者のたしなみと言わんばかりに省略、当該報告書の〔返点法〕第三が提供する返り点計十例のうち、例文（七）（九）（十）は三字句・四字句への返り点を次のように示している。

・奴_二僕_一視_之之_一

・欲_四取_三捨_二酌_一之_一

・未_五嘗_不四嘆_三息_二痛_一恨_於桓_二靈_一也

第一例は、すでに三字句の例として採り上げた。それぞれ連読符号を付けて書き下し文を添えれば、左のごとくになる。

・奴_二僕_一視_之之_一（之_{これ}を奴僕視す）

・欲_四取_三捨_二酌_一之_一（之_{これ}を取捨酌せんと欲す）

・未_五嘗_不四嘆_三息_二痛_一恨_於桓_二靈_一也

（未_{いま}だ嘗_{かつ}て桓_{くわん}靈_{れい}に歎_{たん}息_{そく}痛_{つう}恨_{こん}せずんばあらざるなり）

要するに、三字句については「単に連読符号を連用して三字をつなげ、四字句については「二字ずつ熟語に分ち、それぞれに連読符号を付けよ」との指示である。いわゆる『諸橋大漢和』すなわち『大漢和辞典』（大修館書店）や『広漢和辞典』（同）をはじめ、諸々の辞典・書籍が原則としてこれに従っている。けれども、改めて考えてみれば、右の二種の指示は互いに異なった原理に基づいているのだ。

三字句に関する指示の原理は、いわば便宜主義と呼べるだろう。とにかく三字句を読み下ることさえできれば事足り、片や（○○+○）の

語構成による「奴僕＋視」あるいは「十二＋歳」「三百＋年」「奴虜＋使」「兒童＋視」「先後＋生」にせよ、片や〈○○＋○○〉の語構成による「大＋功德」「楚＋大夫」にせよ、すべて連続符号でつなげてしまえばよい、というわけである。

それに対して、四字句に関する指示の原理は、いわば語構成主義と呼べるだろう。繰り返すまでもなく、四字句を二つの熟語に分けて〈○○＋○○〉の語構成とし、「取捨＋斟酌」「嘆息＋痛恨」または「三令＋五申」「畏悪＋嚴尊」「掣掣＋洩洩」「重賞＋尊爵」「涵淹＋卵育」のように解するわけだ。

そして、三字句・四字句にまつわる問題は、すべて右の二つの原理間の矛盾が引き起こしていると考えてよいだろう。

「有_三楚_二大夫於此_一」(此に楚の大夫有り)は便宜主義による返り点、「先_四楚_三大夫於此_二」(同)は語構成主義による返り点だ。「先_三後_二生_一於吾_二乎_一」(吾より先後生なるを…)と「先_三後_二生_一於吾_二乎_一」(…吾に先後して生まるることを)についても事の本質に違いはなく、前者は便宜主義、後者は語構成主義に基づく返り点である。

また、歴史学・古文書学などが採用している「収_三蔵_二愛_一惜_之」(之を収蔵愛惜す)「区_三処_二分_一置_{倭人}」(倭人を区処分置す)などは、三字句についての便宜主義を四字句にも適用しただけの方式にすぎない。『論語』陽貨「有_三三_二年_一之_二愛_一於其父母乎_一」(其の父母に三年の愛有るか)で諸書の返り点がよろけたのも、熟語を頼みとする語構成主義が「三年之愛」には今一つ通じぬためだろう。とりわけ興味深いのは、前掲の服部宇之吉氏の手に成る「有_三三_二年_一之_二愛_一於其父母乎_一」という返り点だ。何を隠そう、服部氏は「漢文教壇ニ関スル調査報告」における調査員の代表者なのである。二つの熟語に分かつ語構成主義が「三年之

愛」に通用しなかったことを自ら告白しているようなものだろう。こうした『論語』の例すら念頭に置かぬまま報告に及んだとしか言いようがあるまい。

もっとも、ここで服部氏を難じるつもりは毫もない。難ずべきは、それを百年にもわたって何も考えることなく放置してきた漢文教育関係者の怠慢である。むろん、私もその例外ではない。それどころか、最重要指名手配犯の汚名すら免れないだろう。「○○○○○○」と付けるのがぶつうですが、〈○○○○○○〉とつなげてしまう人もいます」だの、「最終的には返り点も慣習に従って打つしかないのです」だのと、よくもまあ、曖昧模糊たる説明を臆面もなく繰り返してきたものだ。あの世での刑罰に備えての危機管理、みごと血の池地獄を渡り切れるよう、水泳の練習でもしているほうがましかもしれない。

では、どうするか。ここまでの諸例からわかるように、三字句は便宜主義でも語構成主義でも返り点が打てる。ところが、四字句については、便宜主義ならば問題は生じないものの、語構成主義では通用しづらい場合(『論語』陽貨「三年之愛」)もある。そもそも、二点の下に三点が位置するという例外措置も、避けられるならば避けておくに若くは莫し。となれば、すべてについて通用するのが便宜主義であることは明らかだ。三字句についても、語構成主義による返り点に比べ、便宜主義に基づく返り点のほうが簡明で読みやすいのは、だれしも首肯するところだろう。万一、五字句・六字句……に返って連続符号を付ける必要が生じても、語構成に影響されることなく、簡便に処理できるのである。

もっとも、便宜主義と称すると、いかにも安直な印象に響き、どうせ読みの順序さえわかればよいのだろうともなりかねない。これは返り点にとって甚だ危険である。極端な場合、次のような返り点を排斥できな

い事態すら招きかねないからだ。

・夫庸知^五其年之先^二後^三生^四於吾^一乎 *〔唐〕韓愈「師説」

・夫庸知^下其年之先^二後^三生^上於吾^一乎

これでも「夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや」と読めるではないか、と聞き直る向きが出てこぬとも限るまい。

したがって、露骨に便宜主義と称することは慎み、語弊を抑えるべく、仮に語順主義とでも呼んでおくのが穏当だろう。返り点を教える現場では、三字句・四字句に返って連続符号を付ける場合に限り、この語順主義という語を用いることとし、語構成主義に対峙する方式として位置付ければよい。その結果、『大漢和辞典』（大修館書店）や『広漢和辞典』（同）など、日本を代表する漢和辞典の返り点にも修正を迫ることになるが、さしたる問題にはならぬ。教室で「かつて唱えられた語構成主義による返り点も行われている」と説明し、いくつか具体例を示せばすむことである。むろん、きれいに二字ずつ熟語に分かてるときにだけ語構成主義に従う方法もある得るが、それこそ便宜主義ならぬ御都合主義に陥ってしまうだろう。

想えば、返り点が訓読の順序を示す符号である以上、たとえ補助符号たる連続符号がからまったとしても、語順主義こそが返り点の本来の機能に副ったものなのだ。語構成の問題は解釈の場面に譲ることとし、訓読の段階においては、簡潔な返り点および連続符号を以て読み順を明確に指示することこそ肝要かと愚考する。

〔附説〕『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について

本論に記した『論語』陽貨「有三年之愛於其父母乎」の訓読に関して補足を加えておく。この一文の訓読は、訓読者によって種々の揺れが生じ、返り点の問題のみならず、訓読そのものの問題としても、甚だ興味深い現象だからである。私見による「複数訓読共存原理」⁽¹⁰⁾にとって、文字どおり恰好の実例たるを失わない。

当該の字句は、『論語』陽貨も篇末に近く、孔子が弟子の宰予の「不仁」を難じた一節のなかに見える。宰予が「服喪の期間は三年が通例だが、一年で十分ではないか。自分は、一年も過ぎれば、贅沢な衣食をたしなんでも痛痒を感じない」と唱えたのに対し、あくまで三年の服喪を主張する孔子が「子は生まれてから三年して、やっと父母の懐を離れるではないか。それをも踏まえて、服喪は三年と決まっているのだ」と言い、そして問題の一句を口にするのである。正確には、呼びかけの「予也」二字を冠した「予也有三年之愛於其父母乎」の全十二字。実のところ、この一句には校訂上の問題があり、『史記』仲尼弟子列伝（宰予）条は当該十二字を記さず、『漢石經』では句末の「乎」字がない。ただし、ここでは訓読の問題だけに焦点を絞るべく、本文校訂にはかかずらわぬこととしよう。古来の注釈を並べ立てることも放棄する。まずは現代の英訳によって二種の解釈を確認しておく。

- ・ Was Yü not given three years' love by his parents?⁽¹¹⁾
- ・ Does Yu have three years' love for his parents?⁽¹²⁾

一見して理解できるように、「三年之愛」three years' loveに接続する前置詞がbyとなるかforとなるかで解釈が分かれている。要するに、〈宰予も両親から「三年之愛」を受けたのではないか〉との解釈と、〈宰予は両親に対して「三年之愛」を抱いているのか〉との解釈だ。「愛」の主体と客体が入れ替わるわけである。

こうした解釈の相違があることを踏まえて、いくつか注解を参照してみよう。本文に既出の訓読も重複を厭わずに掲げる。今、本文に同じく冒頭の「予也」二字は省略、返り点は必要に応じて語順主義による連読符号連用方式に改め、また、要らざる目移りを防ぐべく、書き下し文の字遣いも恣意に統一してしまう。問題の一句の訓読は二つの型に分けられるようだ。

第一は、語順のままに「三年之愛」↓「父母」と読み下る型である。

・有三年之愛於其父母乎⁽¹³⁾

(三年の愛を其の父母に有するか)

(三年の愛を其の父母に有らんか)

訓読者によっては、「愛」を動詞に訓じて「父母」から返り読みすることもある。

・有三年之愛於其父母乎(三年の其の父母に愛むこと有るか)⁽¹⁵⁾

数種の現代中国語訳「對於他的父母、可也有三年的恩愛去報答嗎?」「是不是也有三年的愛心對於他死後的父母呢?」「難道就沒有從他父母那裏得到有三年的撫愛嗎?」などを見るかぎり、「愛」を動詞として理解

するのは少しく無理ではないかとの印象を拭きたいけれども。

第二は、語順を転倒して「父母」↓「三年之愛」と読みもどす型である。こちらのほうが数としては優勢のようだ。

・有三年之愛於其父母乎⁽¹⁹⁾

(其の父母に三年の愛有るか)

(其の父母に三年の愛有らんか)⁽²⁰⁾

(其の父母に三年の愛有りしか)⁽²¹⁾

「於」を置き字扱いせず、まともに訓じている訓読もある。

・有三年之愛於其父母乎(其の父母に於いて三年の愛有るか)⁽²²⁾

以上、まさに「複数訓読共存原理」を立証するようなありさまだろう。「これこそ訓読という営みの持つ自由で豊かな多様性だ」と感じるか、「これだから訓読は当てにならず、徒らに煩わしいだけだ」と思うか、一つの試金石にもなりそうな景色である。

第一の型は、本文でも挙げた一句と似たような感覚の訓読であろう。ここに再掲してみれば――

・夫庸知三年之先後生於吾乎 * (唐) 韓愈「師說」

(夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや)

特に「愛」を動詞に扱って「愛む」と読む訓読は、右を「:吾に先後して生まるるを:」と訓読した感覚に近いかと思う。

第二の型は、「有_{N1}於_{N2}」構文(Nは名詞)の定石に従った訓読である。この構文は、「於」を置き字として扱い、「有_{N1}於_{N2}」の順序で訓読するのが一般だ。決して頻度の低い構文ではない。

・有_{N1}於_{N2}於_{N3} (僖公に寵有り) * 『左伝』莊公八年

・夫子固有_{N1}惑_{N2}志_{N3}於_{N4}公伯寮 (夫子固より公伯寮に惑志有り)

* 『論語』憲問

・凡有_{N1}四_{N2}端_{N3}於_{N4}我_{N5}者 (凡そ我に四端有る者) * 『孟子』公孫丑上

・彌子瑕有_{N1}寵_{N2}於_{N3}衛君 (彌子瑕衛の君に寵有り)

* 『韓非子』說難

・我有_{N1}積_{N2}怨_{N3}深_{N4}怒_{N5}於_{N6}齊 (我齊に積怨深怒有り)

* 『戦国策』燕二

この構文は存在表現の一種であるため、「有」が「無」となる場合もある。

・自然無_{N1}心_{N2}於_{N3}稟受 (自然は稟受到に心無し) * 『世説新語』文学

・与_{N1}其有_{N2}樂_{N3}於_{N4}身 (執_{N5}若無_{N6}憂_{N7}於_{N8}其心)

(其の身に樂しみ有らんよりは、其の心に憂へ無きに執若れぞ)

* 『唐』韓愈「送李愿歸盤谷序」(『唐宋八大家文読本』所収本文)

句末の「N₂」に「斯」や「此」が入るのも、この構文に目立つ例だ。

・有_{N1}美_{N2}玉_{N3}於_{N4}斯 (斯に美玉有り)

* 『論語』子罕

・今有_{N1}璞_{N2}玉_{N3}於_{N4}此 (今此に璞玉有り) * 『孟子』梁惠王下

・有_{N1}楚_{N2}大夫_{N3}於_{N4}此 (此に楚の大夫有り) * 『孟子』滕文公下

按ずるに、問題の『論語』陽貨「有_{N1}三年_{N2}之愛_{N3}於_{N4}其父母乎」は、この「有_{N1}於_{N2}」構文の一種と見なし、第二の型のように、「父母」↓「三年之愛」と返って読んでおくのが妥当であろう。第一の型のごとく、語順のままに「三年之愛」↓「父母」と読み下すのは、訓読の慣習と齟齬を来たす読み方かと考える。

注

(1) 拙共著『漢文訓読入門』(共著者湯城吉信、明治書院、平成二十三年)四七頁。

(2) 以上、同右書/五〇・五二・五四頁。

(3) 林羅山「諺解」鶴飼石斎「大成」古文真宝後集諺解大成(早稲田大学出版部『漢籍国字解全書』第十二巻、昭和二年)一〇六頁下。今、連続符号を補った。

(4) 水沢利忠『史記』八/列伝一(明治書院『新釈漢文大系』88、平成二年)八七頁は「*三令五申之」(之に三令五申す)と返り点を打つが、これは現行の返り点法では認められまい。「之」に一点を付けた以上、次に読む「三」に二点を打つのは自明のことである。

(5) 村井章介「校訂」宋希璟『老松堂日本行録』(岩波文庫、昭和六十二年)二二九頁「老松宋先生日本行録序」/二五九頁『世宗実録』抄・6月13日条。

(6) 吉田賢抗『論語』(明治書院『新釈漢文大系』1、昭和三十五年/昭和六十一年「改訂」二二版)三九五頁。古くは、簡野道明「閩」国語漢文研究会「編」『論語新解』(明治書院、昭和十年)二八〇頁も同じ。

(7) 藤堂明保『論語』(学習研究社『中国の古典』1、昭和五十六年)書き下し文/三四二頁/『別冊』返り点付き原文/五三頁。

(8) 服部宇之吉「校訂」『論語集説』(富山房『漢文大系』第一巻、明治四十二年/昭和四十七年(増補版)陽貨/一九頁。今、連続符号を補った。

(9) 当該「漢文教壇ニ関スル調査報告」は、簡便には漢詩・漢文教材研究会「編」『訓読百科』(昌平社『漢詩・漢文解釈講座』別巻、平成七年)四五六〜四六三頁で目にすることができる。

- (10) 注(1) 所掲書／九五頁。
- (11) D. C. Lau, *Confucius The Analects*, Book XVII-21, p. 179, The Chinese University Press, 1983, Hongkong.
- (12) Chichung Huang, *The Analects of Confucius*, 17, 20, p. 171, Oxford University Press, 1997, New York, Oxford.
- (13) 渡邊末吾『標註 論語集註』(武蔵野書院、昭和四十一年)一七二頁。
- (14) 加地伸行・宇佐美一博・湯浅邦弘『論語』(角川書店《鑑賞 中国の古典》2、昭和六十一年)四三四頁。この一書の訓読については、注(1)に芳名が見える湯城吉信氏から御教示を辱くした。ここに記して謝意を表す。
- (15) 吉川幸次郎『論語』下(朝日新聞社《中国古典選》5、昭和五十三年)六三頁。もと返り点ナシ。今、返り点を付け、原書のルビ「愛む」を歴史的仮名遣いに改めた。
- (16) 陳振史「註」『四書読本』(大成出版社、一九八四年、台南)二二三頁。
- (17) 錢穆『論語新解』(巴蜀書社、一九八五年、成都)四三四頁。
- (18) 関水礼「主編」『白話十三経』(済南出版社、一九九四年、済南)一九三六頁。
- (19) 注(6)および(7) 所掲の三書が示す訓読である。
- (20) 金谷治「訳注」『論語』(岩波書店《岩波文庫》、昭和三十八年)二四七頁。もと返り点ナシ。
- (21) 加地伸行「全訳注」『論語』(講談社《講談社学術文庫》、平成十六年)四〇七頁。もと返り点ナシ。
- (22) 宮崎市定『論語の新研究』(岩波書店、昭和四十九年)三五九頁。もと返り点ナシ。